

1. 鶴来町,新町と月橋町

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4828

1. 鶴来町，新町と月橋町

鹿 野 勝 彦

- I はじめに
- II 鶴来町と各地区の概要
- III 新町と月橋町
- IV おわりに

I は じ め に

金沢大学文学部文化人類学研究室では1993年度の3年次学生の調査実習を、石川県石川郡鶴来町の2つの集落、新町と月橋町において実施した。本報告はその調査実習の報告書であり、当研究室の調査実習報告書としては9冊目のものとなる。¹⁾ 調査実習の目的、方法等は、基本的には従来のそれを踏襲しているが、1993年度は、参加学生数が多かったため、1990年度に続いて、2班編成で調査を行ったことのほかに、当研究室の調査実習としては、後述するように、はじめて都市的な性格の強い集落（新町）を対象の一つとしたことが、これまでと変わった点といえる。

2つの対象集落は、現在では同じ鶴来町という行政単位に属しており、両者の距離も、その末端間では1.5キロメートルたらずと近接しているが、集落としての成りたちや性格はかなり異なっている。巻末の活動報告にも記したように、今回も本調査は同時期に参加者全員が同じ宿舎に滞在して実施したし、前後の予備、補充調査や打合わせ等も、基本的には合同で、ないし連絡をとりながら行ってきたので、情報、資料の相互利用や意見交換を通じて、2つの集落の関係やその間の差異、共通点の比較、これらを含むより広域の地域の性格の把握といったことが、しばしば問題となってきた。このことは、従来の調査実習が、どちらかといえば対象集落そのものに焦点をしばりこむ傾向が強かったのに対し、都市的な集落を対象に加えた狙いでもあった。

とはいえ、結果的には、このことが本報告書の以下の個々の報告に、必ずしも十分に反映されているとはいえない。また、各報告は執筆者の個別の関心に基づいているので、新町、月橋町や両町を含む行政単位としての鶴来町全般についての網羅的記述がなされているわけでもない。もっとも現在の鶴来町を構成する旧町村や、あるいはその一部地区については、相当に詳細な誌史その他がすでに刊行されている。²⁾ そこで本稿では、まず行政単位としての鶴来町と、町を構成する5つの地区の地理的な立地、行政区分、世帯数と人口の動態、生業の変遷などについて、最小限の基礎的記述とその要因の指摘を行い、ついで2つの対象集落、新町と月橋町について、ほぼ同様の項目に関する基礎的記述を行うことによって、以下の各論の前提となる条件を提示することを試みる。

II 鶴来町と各地区の概要

鶴来町は石川郡の北部に位置し、地理的範囲は白山山系を源頭にもつ手取川が形成する扇状地の扇頂部の右岸一帯と、その東部で金沢市の旧内川村地区と境を接する、標高500～600メートル級の^{しりなやま}後高山、倉ヶ岳などの山地西斜面から構成される。手取川を南へ遡れば、河内、鳥越、吉野谷、尾口、白峰の、白山麓の各村に達し、東に山を越えれば旧内川村の、現在は廃村となった堂、菊水などの集落へ通ずる。鶴来町は、もともと一方でこれら山村的な性格の強い地域の、平野部との接点という性格をもつとともに、北方と西方へひろがる広大な手取川扇状地の要であり、さらに北へ進めば野々市町を経て金沢の市街地へも容易に達することができるという位置を占めている。

このような立地を反映して、鶴来を経由する道路網が早くより整備されており、さらに1915（大正4）年には、鶴来と金沢方面（現西金沢駅）の間に軽便の石川鉄道が、また、1925年には鶴来と手取川扇状地の扇端にあたる寺井、辰口方面との間に能美電気鉄道が開通し、両線は1932（昭和7）年には手取川鉄橋によって結びつけられた。一方、金沢一名古屋間を鉄道で結ぶという遠大な構想を背景として、鶴来と手取川上流部の白山麓の村々を結ぶ鉄道の敷設計画も、1920年代はじめより具体化し、1924年から1927年にかけて、鶴来－白山下（鳥越村）間の全線が開通した。これらの鉄道は、1960年代以降、いわゆるモータリゼーションの影響を受け、加賀一ノ宮（鶴来町）－野町（金沢）を結ぶ北陸鉄道石川線以外は、1980年代までに順次代替バスの運行などをともなうて廃線となったが、以上のことは、異なる性格をもつさまざまな地域の接する要衝としての鶴来の性格を、よくあらわしているといえよう。

行政的には、現在の鶴来町の中心部にあたる鶴来地区は、1881（明治14）年にはすでに町政を敷いていた。一方、北部の蔵山、林、館畑地区は1889年に各々が同名の行政村として成立、1954年にこれらの村々が鶴来町と合併した。また、南部の一ノ宮地区はこれより先、1951年に河内村から分離・独立していたが、1954年に鶴来町と合併し、現在の町域が確定した。

鶴来町と、これを構成する5つの地区の世帯数、人口を、たどれる範囲の資料からまとめると、表－1のようになる。

町の成立の経過と表－1からもある程度推測できるように、かつて異なる行政単位であった5つの地区は、それぞれにかなり異なる特徴をもっている。また各地区は、5から17の町会から構成されているが、各地区内の町会の間にも、一定の性格の差が認められる。

鶴来町の中央部に位置する鶴来地区は、現在では15の町会から構成されるが、その大部分は家並の密集した市街地を形成している。このような集落の配置は、すでに藩政期には成立しており、そこは周辺の山村、農村の生産物を集荷、加工、出荷するとともに、それらの地域で自給できない生活必需物資を生産し、ないしは都市や遠隔地から仕入れて供給する、地域の商工業の中心地、いわゆる在郷町であったとされる。そこには商店経営者や手工業者、工場経営者のほか、運送業

表-1 鶴来町と各地区の世帯数、人口動態

年 度	鶴 来 町		鶴 来 地 区		蔵 山 地 区		林 地 区		館 畑 地 区		一ノ宮地区	
	世帯数	人 口	世帯数	人 口	世帯数	人 口	世帯数	人 口	世帯数	人 口	世帯数	人 口
1992	5497	20653	1308	4757	1319	4959	1473	5450	997	3916	400	1571
1990 ^平 ₂	5345	20267	1285	4802	1241	4814	1439	5229	975	3838	405	1580
1985	4907	19271	1304	5064	1103	4296	1268	4854	818	3371	414	1686
1980	4293	17159	1415	5448	872	3528	957	3825	631	2680	418	1678
1975	3789	15253	1548	5946	626	2581	766	3035	458	2016	391	1675
1970	2882	12280	1542	6183	392	1796	338	1528	286	1375	324	1398
1965	2752	12229	1535	6338	372	1804	249	1220	289	1462	307	1405
1955	2570	12349	1362	6007	379	1920	240	1299	297	1652	292	1471
1954 [*]	2561	12392										
1952					369	1955						
1933			991	4943	** 354	1972						
1930 ^昭 ₅			1036	4751								
1925			1065	5234	*** 374	2624						
1920			1021	5004	389	2520						
1916 ^大 ₅			1021	5002	392	2731						
1889 ^明 ₂₂					421	2327			341			

* 町村合併による現鶴来町の成立

資料出所

1992

町役場資料による

** 1937年の数値

1965～1990 『国勢調査市町村地区別人口および世帯概数』各年度版による

*** 1924年の数値

1954、1955 『鶴来町史現代篇』625,627

1889～1952 『郷土誌』22、『蔵山郷土史』170,173,174
『館畑のあゆみ』84

や金融業などを営む者もあり、第2次大戦前後までは定期市も開かれていて、近在から人々がよりあう場でもあった。これらの商工業の中で特に重要な役割を占めた業種は、煙草製造、醸造、製材、薪炭流通、撚糸・機業、刃物生産など、時代により町会によってさまざまだが、いずれにせよそこでの住民構成やその相互関係は複雑で、土地という基本的な資産の有無や多少によって階層や相互関係が固定されてしまう傾向の強い農、山村部とは異なる多様性が存在していたと思われる。

しかし、周辺農山村地域に対する商工業の中心地としての鶴来の役割は、1960年代後半ごろからしだいに失われてゆく。その原因は、地区に内在していたというより、主に外部での状況の変化に求められよう。まず、地区と深いつながりをもっていた山村地域とのつながりは、一方では林業自体の衰退によって、他方では交通事情の改善によって失われてゆき、農村部との関係も、農家の2種兼業化や、後述する農村部のベッドタウン化を通じて弱まってゆく。いいかえれば、鶴来町の後背地であった農山村地域が、直接より大きな中心地である金沢と結びつく条件が整い、中心地としての鶴来町の役割が失われていったのである。現在でも地区で一定の活力を維持している醸造業や製材業の場合には、その原材料や市場をもっぱら地域外に求めるようになっており、周辺地域との結びつきはかなり稀薄になっている。今日、鶴来地区住民の多くは、他地区の住民

と同様に、金沢等への通勤賃労働に従事するようになってきており、その意味では、地区間の住民の職業構成の差異は小さくなってきたともいえる。

ところで、手取川水系の上流域では、今世紀の初め以降、多くの大規模な治山、治水工事や電源開発、森林・鉱物資源開発・観光開発等が行われてきたが、これにともない、鶴来地区はそれらの開発事業の前進拠点としての性格を強くもつようになった。これらのプロジェクトは、必然的に短期的な人口流動や、サービス業を含む関連産業の雇用、需要の激しい変動などをもたらしたが、全体としてみれば、1970年代までは、地区の経済に刺激を与え、発展をうながしてきたといえる。だが、1980年代以降、これらの大型事業が一応終息したことは、さきにのべた周辺の農山村との関係の変質とあいまって、鶴来地区の商工業に大きな打撃を与えた。

こういったさまざまな要因が、鶴来地区における世帯数、人口の動態、特に1970年代後半以降の減少にも反映されているといえる。

とはいえ、鶴来地区は、現在でも鶴来町の経済的、政治的中心であり、役場をはじめとする町の公共施設や、商店などの大部分は、鶴来地区に集中している。ただ、地区の中心は、その南部（今町、新町、本町1、2丁目）から北部（本町3、4丁目）へとしだいに移りつつあるようにみえる。

鶴来地区は、他の地区と同様の、金沢などへの通勤労働者が住民の多数を占めるようになった今日でも、なお多くの住民にとって、他の地区とははっきり性格の異なる、まとまりをもった単位として、認識されているように思われる。しかし同時に、地区内の町会は、それぞれに他の町会とは異なる個性をもつ、と主張する人も多い。このことは、古くより多様な業種の人々が住んでいただけでなく、そのうちの特定の職種の人々がある町会に比較的まとまっている（ないし、かつてそうであった）ことを、ある程度反映している。こういった重層的な地区、町会への帰属意識は、とりわけ、鶴来地区全体を氏子とする金劔宮の秋祭りである「ほうらい祭り」にあざやかに表現されているが、それについては、各論にゆずる。

一方、鶴来町の北部に位置する蔵山、林、館畑地区は、基本的には、水稻耕作を基幹とする農村地帯であった。手取川は元来氾濫のおきやすいいわゆる暴れ川として知られており、集落の多くはこれに備えて東部の山麓や扇状地上の微高地に形成されていたが、1896年の大氾濫を契機として灌漑用水路の大改修（七カ用水の成立）と耕地整備が進められた。水稻耕作以外の副業としては、畑作、薬加工や、山麓の集落を主として養蚕、林業などが行われたほか、小規模な工場や商店経営などを行う者もあった。しかし、1960年代半ばごろまでは、これらの集落は、なおその大部分が農家、それもその大半が専業ないしは1種兼業農家から、構成されていた。

しかし、1960年代後半に入ると、これらの農家の多くが2種兼業化しはじめるとともに、従来の農地を宅地に造成し、住宅を建設して作られたいわゆる「団地」集落が、次々と形成されるようになる。これら「団地」住民の多くは金沢やその近郊へ通勤する勤労者を世帯主としており、

その形成には、道路、鉄道など交通の便が良く、かつ地価も比較的安い、といった条件が有利に働いたと思われるが、このような金沢のベッドタウンとしての「団地」の形成とそこへの人口の流入は現在も続いており、「団地」集落（町会）に住む世帯数、人口が鶴来町全体のそれに対して占める割合は、1992年3月にはおよそ40%を占めるに至っている。³⁾ 在来の町会の内部に、同様の経過で形成された住宅に住む世帯、人口を加えれば、こういった「新住民」の占める比率は、さらに高くなる。ちなみにこのような「団地」町会は、鶴来町北部の3地区に集中しており、3地区48町会のうち20町会を数えるが、鶴来地区では15町会中1町会にすぎず、後述する一ノ宮地区には存在しない。

要するに、北部地区を構成する集落は、大別して、在来の農村的集落と1960年代以降に形成された「団地」集落とに大別できる。前者には近年の移住世帯を若干含むとはいえ、大半の世帯は現在もなお二種兼業ながら農地を保有する農家であり、町会の多くは氏神の神社やその他の公共施設を保有、維持し、独自の祭礼をはじめとする行事を運営する自治組織として機能しているのに対し、後者では、白山麓のダム建設によって水没した集落の住民が集団移転したことによって形成された集落をのぞけば、概して町会は行政との連絡のための組織という性格が強いといえるだろう。

町の南部に位置する一ノ宮地区は、農村地域であると同時に、その特色として、加賀一ノ宮と称される白山比咩神社と、後高山とその山麓一帯の獅子吼手取県立公園とを擁する、観光地としての性格をもつことがあげられる。白山比咩神社は、全国の末社約2700、年間の献饌者約34,000人（1975年）を公称する（『一ノ宮郷土誌』306）有力な神社であるが、鶴来町住民との信仰を通じての関係は意外なほど希薄であり、町内の直接の氏子は一ノ宮地区の3町会にすぎない。ただ鶴来地区は、一面で白山比咩神社の門前町としての性格をもっており、白山比咩神社を加賀一帯のみならず全国からの多数の来訪者をひきつける「観光資源」とみる視点が、すでに今世紀初頭から、鶴来地区とその住民の間にあったことは、注目に値しよう。

また、後高山一帯は、1923年には、石川県内ではもっとも早くスキー場が整備され、1926年には鶴来町営に移管されるなど、観光地として積極的に開発されてきた。このような動きは第2次大戦により一時頓挫するが、戦後、1950年代後半から、温泉の掘削、ロープウェーの架設、園地の整備、旅館、民宿の建設等が、行政、民間双方によって進められ、今日に至っている。一ノ宮地区は鶴来町内でも、これらの施設が集中する地区なのである。もっとも観光関連産業は、鶴来町や一部の住民の間で今後の発展を期待されている業種であるとはいえ、現状ではなお町の経済の中で基幹的役割を果たしているとはいえない。

以上を要約すれば、現在の鶴来町は、もともと地域の商工業の中心であった鶴来地区と農村であったその他の地区とから構成されているが、現在では全体として金沢の郊外地域としてのベッドタウン化が進み、特に町の北部では「団地」形成をともなってその傾向が著しい。一方、鶴来

地区の中心性は、周辺地域の変化とともに、しだいに失われてきたといえよう。

Ⅲ 新町と月橋町

以下では、鶴来地区に属する新町と、蔵山地区に属する月橋町について、さきに述べた各地区の特性を前提としつつ、補足的な記述を行う。まず、両集落について、その世帯数と人口の動態を得られる資料からまとめると、表－２のようになる。

表－２ 新町、月橋町の世帯数、人口動態

年 度	新 町		月 橋 町	
	世 帯 数	人 口	世 帯 数	人 口
1992	91	372	116	518
1990	88	388	119	544
1985	94	411	115	533
1980	110	447	124	580
1975	162	627	106	498
1970	153	625	111	531
1965	107	544	126	551
1955	109	514	116	596
1952			106	595
1933	86	463		
1889			126	728

資料出所 表－１に同じ

新町は鶴来地区の中央部をほぼ南北に貫く旧街道（国道157号線）沿いの南部に位置する、在郷町の典型ともいべき市街地の集落で、かつては特に街道に面して、山村部とのつながりの深い薪炭商、木材商をはじめ、食品加工、醸造、製材など、周辺の農山村を主な取引の対象とする多様な商工業に従事する家々が軒を列ねていた。⁴⁾ 現在ではそれらの店舗のかなりの部分は転業し、一部は廃業してしまっているが、それでも往時の面影は、現在もある程度残されている。もっとも、営業を続けている店舗の中にも、現在の経営者の世代が引退すれば、後継者が存在しないという例も少なくない。鶴来地区内でも、商業の中心が、近年では北部の本町、特に3、4丁目方向に移りつつあることは、先にも述べたが、これには地区の中心部をはさむように東西にバイパスが通じたことの影響が大きいとも言われる。いずれにせよ、こういった新町の商工業の退潮ぶりは、在郷町としての鶴来町（とりわけ鶴来地区）の変化そのものを体現しているといえよう。

けれども、醸造、製材といった業種自体としては、従来のそれを継承しながら、単なる在郷町の地場産業という性格を脱した企業が、新町にはいくつか見られる。これらの企業は、一方で地域の立地条件（例えば豊富で良質な水）を生かし、一定数の地元の労働力を雇用しながら、原材料や市場の主要な部分を、現在では外部に求めることによって、存続、発展してきた。また、同様に従来からの業種をある程度継承しながら、その本拠地をより条件に恵まれた地区外に移して

いった商工業者も存在する。

他方、新町においても、街道筋に直接面していない区域の住民は、以前から必ずしも直接商工業に従事していたのではない世帯が多かった。また、これらの住民の中には、もともとこの地区とつながりが深かった山村地域からの移住者世帯や、手取川上流域での土木、建設工事に際して転入し、工事終了後もそのまま定着した世帯などが若干含まれている。

要するに現在の新町の住民構成は相当に複雑であり、かつ通時的にもかなりの出入りがあって流動的であったといえる。地区の世帯数、人口の動態を全体としてみれば、1960年代後半から1970年代前半にかけて急増し、1970年代半ばをピークとして、以後1980年代前半にかけて激減する。しかし、古くより商工業者として新町に住みついていた人々に限ってみれば、1960年代後半以降、世帯数、人口は微減の傾向を示しており、世帯規模は比較的安定していると考えてよいであろう。各論で扱う町会の組織の運営や、諸活動の中核をになっているのも、おおむねは、現在では金沢方面への通勤労働者であるような人々を含む、しかし元来は数世代以上にわたって、この地区で商工業に従事してきた家系に属する人々であるように見える。そして、こういった傾向は、新町ばかりでなく、隣接する今町や古町など、鶴来地区南部の諸集落では、ほぼ共通しているといつてよいであろう。

一方、月橋町は、鶴来町の東北部に位置する蔵山地区のなかでもっとも鶴来地区に近接し、東部の倉ヶ岳山麓に列村状に形成された集落である。集落を貫くように高橋川が、その西部に広がる水田地帯には七カ用水の一つ、富樫用水が北流しており、さらにその西を国道157号線と北鉄石川線が走っている。月橋町は、もともと水稻を基幹作物とする農村であり、1960年代前半までは大半が農業を主生業とする農家であった。ただ、後の各論でもふれるように、その経営面積はこの地域としてはむしろやや狭少であり、一方、かなり広大な山林を所有し、なんらかの形で林業を兼ねる世帯もかなり多かった。これに加えて、冬期は積雪のために農作業ができないという事情もあり、出稼ぎを含むさまざまな副業も営まれていた。要するに、水稻耕作を中心とする農村といい農家といっても、その経営形態は、月橋町では、一般にかなり複雑で多様だったのである。

このような農村の形が一変するのは、月橋町の場合、1970年代以降のことで、農家数自体は漸減にとどまるが、そのほとんどは2種兼業化し、その大半は水稻耕作の一部の過程を請け負いにし出すようになる。一部の農家は、ナシなどの果樹栽培に示されるように、積極的な農業経営への取り組みの姿勢を見せているが、これも集落全体の「農業離れ」の傾向をとどめるほどの役割は果たしていない。また林業の果たす役割も、1970年代以降急速に低下しつつあり、実際に林業に従事している世帯は、現在では数えるほどしかない。

農林業の退潮とともに、住民の一部には地区内に鉄工所や自動車整備工場、陶磁器販売業といったさまざまな事業所を設立、経営したり、宅地を造成、分譲するといった動きが出てくる。これ

らの事業所や住宅は耕地を転用することによって成立したもので、月橋町の在来の集落をとりまくように、周辺部に散在している。新たに建設された住宅の一部には、これまで月橋町とかかわりをもっておらず、農地や山林なども所有していない、新しいタイプの住民が転入してきた。これらの世帯の多くは交通の便を生かして、金沢等へ通勤することを前提としている。1970年代後半以降の月橋町の世帯数、人口の増加は、こういった地区外からの住民の転入に多くをおっている。ただ、月橋町では、これらの世帯は、いわゆる「団地」として一定の独立した単位を形成することなく、少なくとも形式的には月橋町の町会に組みこまれている。

一方、在来の住民の中にも、実質的には農業や林業に従事せず、また自営業を経営する選択もせず、通勤による賃労働を主な職業とする世帯が増加してきた。ただ、これらの世帯は、なお田畑や山林を保有し続けている。すなわち、農家、林家としての性格を、当面はある程度残したままなのである。

IV お わ り に

在郷町としての鶴来地区の中心部に位置する商・工業集落であった新町と、農村部であった蔵山地区の、それも山地に近く、山村的性格をあわせもっていた月橋町とは、もともと集落のなりたちからも、住民の職業構成からも、明確に性格の異なる集落であった。しかし、1960年代以降、それぞれの集落の性格は著しい変化をとげてきた。生業面からこれを要約すれば、いずれの集落においても、また個々の世帯の内部においても多様化がすすみ、かつ、通勤賃労働の比重が高まったということであり、その意味では、両集落やそれを構成する世帯の生業基盤が、多少とも共通してきたといえないこともない。このような集落、地区レベルでの変化は、一方では地域をとりまく外部、それも日本全体、ないしは日本を超えるレベルでの変化が、地域をまきこんだ結果生じたものといえようが、他方でそれは、個人、世帯のレベルでの外的状況の変化に対応した主体的反応、選択の集積によるものであるということもできる。

とはいえ、現在もなお、個々の集落が、それぞれに一定の独自性を維持していることはいうまでもない。その独自性は、生業面ばかりでなく、町会としての組織、活動のありかたや、住民の意識など、さまざまな側面で、なおかなり強固に見られるところである。本報告書の以下の各論の多くは、こういった地区の個性ともいべきものを、さまざまな側面から記述し、検討している。

ただ、新町を含む鶴来地区が、かつての地域の中心としての性格を失ってきたことは、個別の集落、地区そのもののありかたばかりでなく、集落間、地区間の関係をも、著しく変化させてきた。このような変化と対応して、近年では、これまで行政上はともかく、実質的な単位性の希薄であった鶴来町や、鶴来町を要として手取川上流域にひろがる石川郡の諸村を含む地域を、1つの単位性をもった地域としてまとめあげようという試みが、さまざまな形でなされはじめ

ている。⁵⁾ これを要するに地域内での、地区ないし集落レベルの個性が問題になっていた時代から、全国的なレベルにおいての地域の個性が問題にされはじめた時代への転換とみることができよう。こういった地域全体の変化を視野におさめることは、本報告書の課題をこえるが、当研究室としては、今後も特に白山麓の各地で、集落レベルでの調査を重ねてゆくことにより、この問題を考えていきたい。

本報告書は、例年のことながら、学部3年生の調査実習という制約上、指導者、執筆者の力の限界から、事実の誤認や分析の不充分さなど、多々問題を含んでいると思われるが、関係各位の忌憚のないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

注

- 1) 金沢大学文学部文化人類学研究室による調査実習報告書の一覧は、巻末の参考文献参照。
- 2) 現鶴来町と、それを構成する旧村である蔵山、館畑、林、一ノ宮各地区については、詳細な郷土史が刊行されている。旧鶴来町（鶴来地区）全域を対象とした郷土史は、近年は刊行されていないが、本町の一部地区を主対象としたものや、商工会による商工業地区を主対象とした調査報告がある。巻末参考文献参照。
- 3) いわゆる団地集落の世帯数は2,218、人口7,963で、それぞれ町全体の40.3%、38.6%を占める。町役場資料による。
- 4) 1968年の商工会名簿によれば、新町には30業種37軒の企業があり、そのうち食品関連が12業種15軒、木材、木炭など林業関連が5業種7軒を占めている。『鶴来商工会70年史』305～322による。
- 5) 白山麓の1町5村による「白山連邦合衆国」による観光開発構想など。